弘前ねぷた参加団体協議会 創立２０周年記念誌

組ねぷたを見直そう

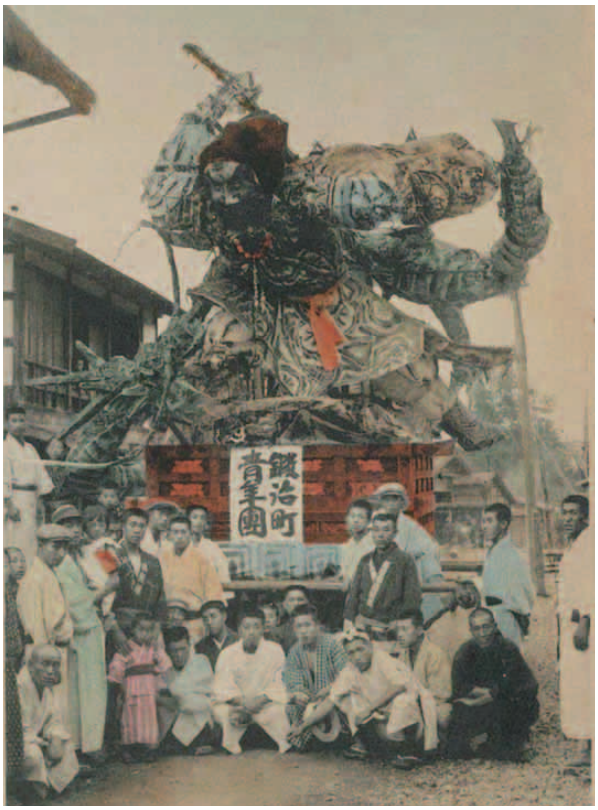
（昭和の組ねぷた　写真提供：宮川慎一郎氏）

弘前ねぷた参加団体協議会

弘前ねぷた参加団体協議会 創立２０周年記念誌

組ねぷたを見直そう

弘前ねぷた参加団体協議会



（昭和の組ねぷた　写真提供：宮川慎一郎氏）

ー　も　く　じ　ー

『組ねぷたを見直そう』発刊にあたって……Ｐ１
弘前ねぷた参加団体協議会沿革……Ｐ２
Ⅰ　ねぷたの起源と呼称……Ｐ３
Ⅱ　弘前ねぷたまつり……Ｐ６
Ⅲ　組ねぷたの制作と構造……Ｐ１１
組ねぷたの制作技法の分析と整理
　１．制作技術者の組織体制……Ｐ１５
　２．題材の構想……Ｐ１９
　３．骨組み……Ｐ３０
　４．内部照明の設置……Ｐ４８
　５．紙貼り……Ｐ５３
　６．墨入れ……Ｐ５８
　７．ロウ引き……Ｐ６３
　８．色付け……Ｐ６７
　９．台座と台車……Ｐ７３

『組ねぷたを見直そう』　発刊にあたって

弘前ねぷた参加団体協議会　　会長　大中　実

弘前ねぷた参加団体協議会は、平成６年９月３０日の創設以来、弘前ねぷた参加団体間の親睦・ねぷたフォーラム・ねぷたに関する講演会・研修・情報交換などを行い、各団体が切磋琢磨しあいながら、安全で楽しいねぷた運営ができるよう努めて参りました。

この度、当会の設立２０周年を記念し、これまで当会の活動に多大なるご協力を賜りました弘前ねぷたに携わる様々な方々に御礼をさせて頂きたいと思い、「組ねぷた」の歴史と制作技法に関する資料集を刊行することといたしました。

現在の弘前ねぷたの主流となっている「扇ねぷた」は明治時代に流行り始め、昭和初期に完成した様式であり、江戸時代から続く伝統ある弘前ねぷたといえば、実は「組ねぷた」なのです。

「組ねぷた」は、その制作に膨大な時間と多くの人手が必要です。一生懸命に針金や竹材で骨組を作り、一枚一枚和紙を貼り、そして丁寧に彩色をしていくという作業工程には、「扇ねぷた」とは比較にならないほどの時間と労力を要します。しかし、その制作を共有することで、ねぷた団体の絆をより固くすることができます。完成した暁には、程よい疲労感とともに大きな感動に包まれ、皆で喜びを分かち合うことができます。こんな素敵で楽しい体験を、組ねぷたの作り方がよくわからないという理由で経験できないのは本当にもったいなく残念だなという思いから、この「組ねぷたを見直そう」の刊行を企画いたしました。

本書では、現在、本ねぷたで「組ねぷた」を制作している、西地区ねぷた親交会、富田清水町会青年部、盟友會、必殺ねぷた人の４つの団体に協力をお願いし、各団体の制作ノウハウやコツを惜しみもなく全て提供してもらいました。４団体の方々が何ヶ月もの間、コツコツと制作にまつわる技術をお互いに交換し合い、情報を積み重ね、親交を図りながら作ったこの本からは「組ねぷた」に対する熱い想いも一緒に伝わることと思います。

本書は当協議会会員のみならず、市内の小中高等学校、図書館等へも寄贈いたしますので、弘前市民全ての方が「組ねぷた」を見直す契機となることを期待しています。

最後に、本冊子を作成するに当たり協力してくださった４団体である、西地区ねぷた親交会、富田清水町会青年部、盟友會、必殺ねぷた人の皆様、「弘前市市民参加型まちづくり１％システム」で製本費の一部を税金で賄うことをご承認くださった審査委員の皆様、弘前のねぷたを応援し、当協議会へご協賛くださった企業の皆様に感謝をお伝えし、刊行のご挨拶にかえさせていただきます。

平成 28 年 3 月吉日

弘前ねぷた参加団体協議会 沿革

平成　６年　９月３０日	○弘前ねぷた参加団体協議会設立。会員数３４団体。 ＊過去２回にわたって開かれた「ねぷたまつりフォーラム」をきっかけに設立。 初代会長に小田桐武志氏（向外瀬ねぷた愛好会）就任。
１１月１６日	○弘前ねぷた参加団体協議会主催「弘前ねぷたフォーラム」開催。 ＊弘前ねぷたまつり主催者への要望事項などについて意見交換。
平成　７年　９月２０日	○「弘前ねぷたフォーラム」開催。＊以降、平成９年まで年１回開催。
平成１０年	○この年から「弘前ねぷたフォーラム」を年２回開催。
９月～１０月	○「ねぷたまつりアンケート」の実施。 ＊まつり主催者および参加団体への要望事項など取りまとめ、弘前ねぷたまつり主催者へ申し入れ。
平成１１年　１月１９日	○第２代会長に松山憲一氏（桔梗野ねぷた友の会）就任。 ○総会で弘前ねぷたまつり主催者に対する要望事項とりまとめ。 （以降毎年）
２月２５日	○「弘前ねぷたまつり関係者会議」へ初参加。（以降毎年）
平成１２年　８月　１日 ２日	○弘前ねぷた参加団体協議会主催による初の「出陣式」を挙行。 （以降毎年）
平成１３年　９月３０日	○青森県文化祭シンポジューム「ねぷたで遊ぼう」に参加。
平成１５年　２月１８日	○第３代会長に三上富秀栄氏（茂森新町ねぷた同好会）就任。
平成１８年　８月　２日	○「弘前ねぷた保存会長賞受賞」
平成１９年	○弘前ねぷた保存会に対する要望書提出。 ○「弘前ねぷた保存基準策定委員会」オブザーバー出席。（計３回）
平成２０年	○金魚ねぷた飾り付け事業開始。（以降毎年） ○弘前ねぷた参加団体協議会のホームページ運用開始。 ○「弘前ねぷた保存基準策定委員会」オブザーバー出席。
平成２１年	○四神をねぷたに忍ばせる活動開始。（以降、各参加団体に毎年要望）
平成２２年	○弘前ねぷたまつりに合わせて、金魚ねぷたコンテスト実施。
平成２３年　１月１６日	○弘前市主催の「ねぷたシンポジウム」コーディネイト。
	○「ねぷた囃子でギネスに挑戦」後援および準備協力。
７月３１日	○「ねぷた囃子でギネスに挑戦当日の運営および参加に協力。
平成２５年	○弘前城雪燈籠まつり・津軽錦絵大回廊のために ねぷた絵等の提供。 （以降毎年）
平成２６年	○弘前ねぷたまつり運行安全指針策定委員会に参画。 ○記念誌発刊のための組ねぷた出陣団体による打ち合わせ会開始。
平成２７年	○弘前ねぷたまつり合同運行安全会議立ち上げへの協力。
平成２７年　４月１０日	○第４代会長に大中実氏（東地区町会連合会ねぷた）就任。
平成２７年　９月２１日	○「組ねぷたシンポジウム」開催。
平成２８年　３月３１日	○創立２０周年記念誌「組ねぷたを見直そう」発刊。

Ⅰ　ねぷたの起源と呼称

ねぷたの起源・伝説には諸説があるが、確固たる資料（記録）がなく、いずれも推測の域を出ない。その中でも比較的裏付けがしっかりしている松木説を載せておくことにする。

「眠り流し」は、子どもの健やかな成長と無病息災（健康）を願うために行われた子どもの行事で、津軽では「ねぷた流し」と呼ばれ、これから「ねぷた」という名詞が生まれた。

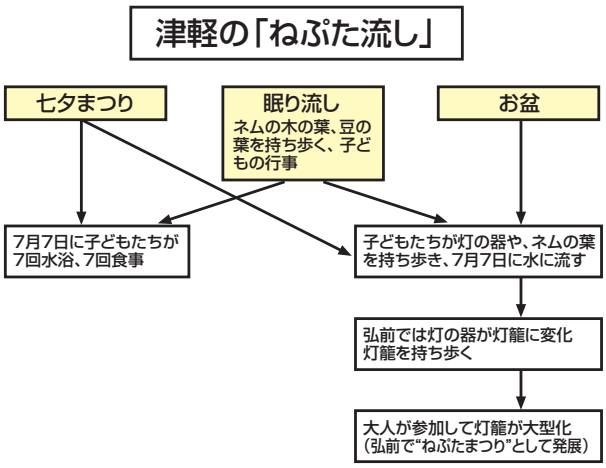
「ねぷた」は灯の器のことで、のちに燈籠（ねぷた燈籠）のことを意味し、これを持ち歩く行事が「ねぷた流し」で、祭りに発展して「ねぷたまつり」になった。「ねぷた流し」は、「眠り流し」と「七夕」と「お盆」が習合した行事。

弘前大学名誉教授（医学部麻酔科学）　松木明知

（1）「眠り流し」と「ねぷた流し」（ねぷたの起源）

「眠り流し」は旧暦の７月４日ごろから６日にかけて行われ、夜なので灯火が必要であった。享保年間（1716 年～）の初め、弘前では「ねぷた流し」の灯火（灯の器）が燈籠に変化し、この燈籠を「ねぷた」と呼んだ。大変見事なものであったので、５代藩主 信寿が御在国（参勤交代が無く、弘前にいること）ときには必ずといっていいほど織座（現 紺屋町の弘前明の星幼稚園）や報恩寺でご覧になった。

初期の燈籠が、長い棒の先に燈籠が付き、その上に飾り物がついていることから、今日の子どもの手持ち「ねぷた」に大きく影響している。



ねぷたまつり派生までの流れ

織座の人（第４代藩主信政の時代に野本道玄をはじめ、京都から弘前にやってきた人びと）が、大きく関係しており、織座が「ねぷた」発祥の場所であったと考えられる。

本来、子どもの年中行事「燈籠流し」が主体だった行事が、いつしか大人が参加してから燈籠が大型化し運行に力点が移行していった時、「ねぷたまつり」に発展していった。

平安時代初期、征夷大将軍 坂上田村麻呂が蝦夷征伐の折、敵（蝦夷）を誘い出すために大きな人形（燈籠）を作ったという**坂上田村麻呂説**は、この説の元になったと思われる『東日流由来記』の信憑性がないこと、坂上 田村麻呂が津軽に来たという史実もないことから、虚構（フィクション）である。

1593（文禄２）年、藩祖 津軽為信が、京都の盂蘭盆会の趣向として大燈籠を作らせたという**津軽為信説**は、郷土史研究家・松野武雄が1931（昭和６）年に提唱したものであるが、この説の元になったと思われる『津軽偏覧日記』の信憑性がないこと、

① 京都を中心とする近畿地方の史料に「大燈籠」の記録が存在しない。

② 為信に大燈籠の製作を進言したとされる服部長門守は、この時まだ家臣ではなかった。

③ 享保年代に入って、燈籠の製作中止を具申したとされる勘定奉行・三上仁左衛門が家臣として存在しない。

④ 1593（文禄２）年から 1722（享保７）年の『御国日記』に“祢ふた”（ねぷた）の最初の記録が登場するまで、130 年間もの間が空白になっていることなどから、この説も藩祖・為信を讃える虚構（フィクション）である。

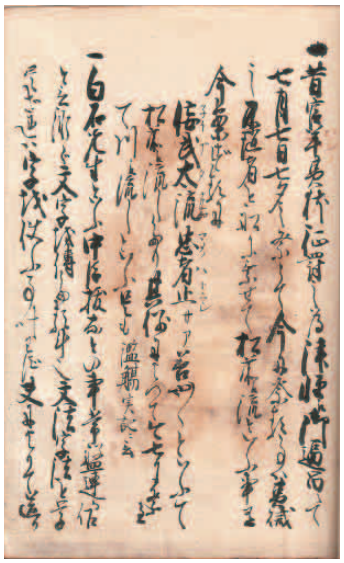
奇怪・不思議なという意味の「ネプターン」から派生したという**アイヌ（語）起源説**や、“寝（ね）ぷて〔「眠たい」の津軽弁〕”が転訛して「ねぷた」になったいう説なども、これを裏付ける資料がなく、起源とするには無理がある。

（２）ねぷたの呼称

津軽では他の地域と同様に、いわゆる「眠り流し」が行われ、それを「ねぷた流し」と呼んでいた。

「ねぷた」という呼称は「眠（ねむ）り」から派生した可能性が高く、「合歓（ねむ）の木」（ねぶのぎ）派生説、「眠（ねぶ）し」（ねぶりかけ）・「眠（ねぶ）たし」（「ねむたし」ではない）派生説は方言学的に無理がある。

津軽では最初から「ねぷた流し」、「ねぷた」と発音していたが、「ぷ」の表記法（「ぷ」などの半濁音を「 ゜ 」の半濁音符で表記する書き言葉）を知らなかったために「ぷ」の代わりに「ふ」、「ぶ」、（「む」）が用いられた。



「本藩濫觴（らんしょう）実記」（寛政５年）

昔、官軍が夷狄征伐（いてきせいばつ）のために津軽に逗留（とうりゅう）し、７月７日の七夕祭りで、夷賊の不随者を船に乗せて松島に流したとある。

＊写真の真ん中に「子ブタ」の表記が見られる

江戸時代に「ねぷた」と発音する言葉はなく、明治時代に「ねぷた（ねむた）」の当て字「佞武多（ねぷた）」「佞武太（ねぷた）」の「武（ぶ）」を「ぶ」と読んだために「ねぷた」が普及した。

弘前大学名誉教授（医学部麻酔科学）　松木明知（まつきあきとも）

私たち津軽っ子は、眠たい時に津軽弁で「ねぷて」と言うが、「ねぶて」とは言わないことから考えても、当時の人は「ねぶた」ではなく、「ねぷた」と呼んでいた可能性の方が高い。

東北地方を始め、信越地方「ネンブリ流し」、関東地方「ネブチ流し・ネボケ流し・ネムッタ流し」等の民族語彙分布と方言学から語源は、「眠り流し」→「ねむた流し」→「ねむた」→「ねぷた」と転訛したと考えるられる。

（３）ねぷたの記録

ねぷたが初めて記録に登場するのは、1722（享保７）年の弘前藩庁『御国日記』で５代藩主信寿（のぶひさ）が「祢（ね）むた流」を高覧したとある。その内容は以下の通りである。

■『御国日記』1722（享保７）年７月６日

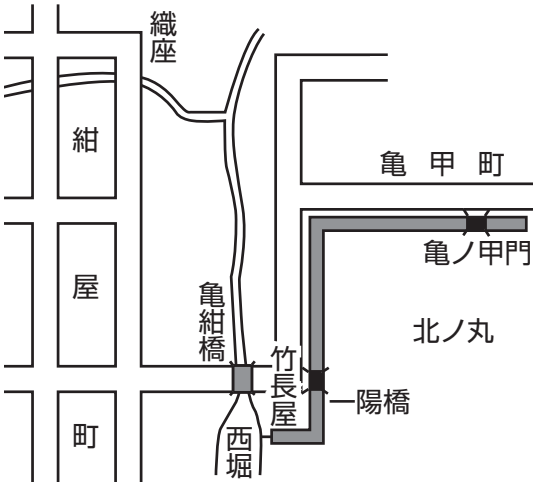
「６日、５代藩主 信寿公は四半過（午前 11 時）に紺屋町の織座（おりざ）へ おいで遊ばれました。
お供の者はいつもの通りです。織座では“祢（ね）ふた”を御覧になりました。
“祢むた”が殿様の前に出る順番は左の通りです。

１番　本町・親方町・鍛冶町
２番　茂森町　　３番　土手町
４番　東長町・本寺町
５番　和徳町　　６番　紺屋町
７番　亀甲町・田茂木町　　８番　荒町

右の通りであります。“祢むた流”は紺屋町から春日町へ通って行きました。
尾形様（殿様のこと）は午後８時にお城にお帰りになりました。」

弘前藩庁「御国日記」（享保７年７月６日）

信寿公が隔年で「ねぷた」を見物しているのは、参勤交代の絡みで、弘前にいた時に「祢ふた流」が整然と行われていたからにほかならない。



「織座」と信順（のぶゆき）の整備した「竹長屋」との位置関係

コラム -1- 【眠り流し】

昔は眠ることは良くないことで、「眠り」は一種の罪悪と見なしていたので、眠り（睡魔（すいま）ともいうべき目には見えない魔物）を身体から追い払って水に流してしまうことを「眠り流し」といっていた。「眠り流し」は、禊（みそぎ）と祓（はら）いの思想を主眼として病気や災（わざわ）いをもたらす厄病神（やくびょうがみ）を追い払う「神送り」という行事から派生したものである。

子どもの無病息災と健やかな成長を祈願する風習として、「眠り流し」は子どもたちが行っていた。

子どもたちは合歓（ねむ）の木の葉や豆の葉を持ち歩き、それらの葉を身体にこすって「ネムの葉流れろ、豆の葉留まれ」と唱えて川に流した。（ネムの木の葉には睡魔を含めた何か悪いものが宿っていると考えられていたので流れてしまえばよく、「まめまめしい」を意味する豆の葉は留まって欲しいとの願いが込められていた。）

コラム -2-

【「ねぷた」と「ねぶた」の違い】

青森県内各地のねぷた･ねぶた。地域によって「ぷ」と「ぶ」が使い分けられている。弘前市や南黒地方では「ねぷた」の呼び方が多いのに対し、青森市や周辺町村と下北は「ねぶた」（佐井村や東通村は「ねぷた」）の呼び方が多い。面白いことに五所川原市の立佞武多は、周辺が全て「ねぶた」なのに対し、「たちねぷた」と発音している。発音や訛（なま）りの違いなのかもしれなが、どうして地域によって２つの呼び方があるのかを解明する手段は残念ながらない。現在のところ「ねぷたの呼称」については松木説が有力である。

運行隊形からよく「弘前ねぷたは“出陣ねぷた”で、青森ねぶたは“凱旋（がいせん）ねぶた”」、「弘前ねぷたは“静のまつり”で、青森ねぶたは“動のまつり”」などと表現されることもあるが、弘前と青森の違いをわかりやすく説明するためのイメージでしかない。また弘前は扇形の山車が多いことから扇型＝「ねぷた」、人形型の山車なので青森＝「ねぶた」というふうに呼び方の違いは山車の形状が違うからと思いこんでいる人も多い。

いずれにしても、ねぷた･ねぶたの呼び方は表記上や発音上の問題であって、昭和 20 年代後半から使い分けがはじまり、1956（昭和 56）年に「弘前ねぷた」、「青森ねぶた」の名称で、重要無形民俗文化財に指定されから区別が強調されるようになっていく。

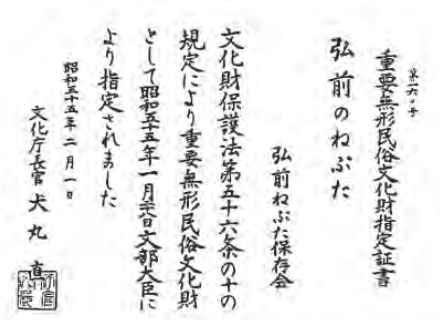
Ⅱ　弘前ねぷたまつり

津軽の夏の夜を焦(こ)がす「弘前ねぷたまつり」は、『三国志(さんごくし)』や『水滸伝(すいこでん)』などを題材にした勇壮で色鮮やかな武者絵が描かれた扇ねぷたや、組ねぷた大小合わせて約 80 台が市内を練り歩く伝統行事である。

「ヤーヤ・ドー」の掛け声と囃子(はやし)(太鼓・笛(かね)・鉦)の響きは、ねぷたに魂(たましい)を与え、津軽っ子の血を奮い立たたす。

町内、団体、企業やグループなどで製作、運行される弘前ねぷた。津軽には「ねぷた馬鹿(ばか)」と称される人たちがいて、ねぷたの季節になると、学校や仕事もそっちのけで、寝ても覚めてもねぷたに熱中する。ねぷたには各団体の歴史があり、そして、ねぷたを心待ちにしている一人ひとりが独自の「ねぷた論」をもつ。

弘前ねぷたまつりは、1980（昭和 55）年１月 28 日から重要無形民俗文化財の指定を受けている。また、弘前ねぷたまつりが青森県を代表する夏まつりとして観光振興に寄与していることから、2006（平成 18）年度の高円宮殿下記念地域伝統芸能賞を受賞。1996（平成８）年７月１日には、環境庁より、津軽独特の文化として、ねぷたとともに育まれてきた囃子の音色が評価され、「日本の音風景 100 選」に認定された。


第六ノ十
重要無形民俗文化財指定証書
弘前のねぷた
弘前ねぷた保存会
文化財保護法第五十六条の十の規定により重要無形民俗文化財として昭和五五年一月三日文部大臣により指定されました
昭和五十五年二月一日
文化庁長官　犬丸　直

重要無形民俗文化財指定証書

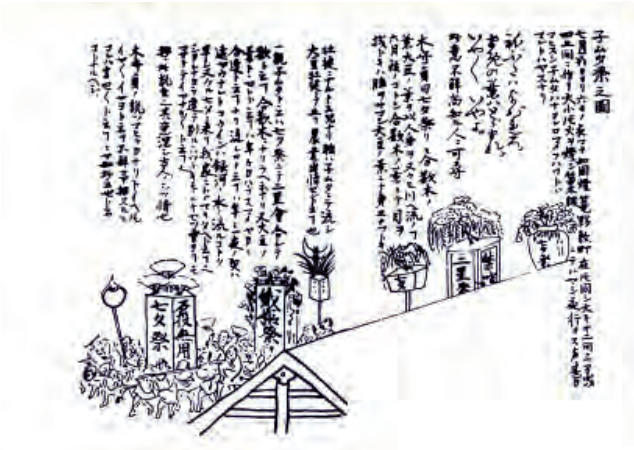
町内、団体、企業やグループなどで製作、運行される弘前ねぷた。津軽には「ねぷた馬鹿」と称される人たちがいて、ねぷたの季節になると、学校や仕事もそっちのけで、寝ても覚めてもねぷたに熱中する。ねぷたには各団体の歴史があり、そして、ねぷたを心待ちにしている一人ひとりが独自の「ねぷた論」をもつ。

弘前ねぷたまつりは、1980（昭和 55）年１月 28 日から重要無形民俗文化財の指定を受けている。また、弘前ねぷたまつりが青森県を代表する夏まつりとして観光振興に寄与していることから、2006（平成 18）年度の高円宮殿下記念地域伝統芸能賞を受賞。1996（平成８）年７月１日には、環境庁より、津軽独特の文化として、ねぷたとともに育まれてきた囃子の音色が評価され、「日本の音風景 100 選」に認定された。

（１）初期のねぷたまつり
（享保～寛政　1716～1801）

ねぷたが初めて記録に登場するのは、1722（享保７）年の弘前藩庁『御国日記』で５代藩主信寿(のぶひさ)が「称むた流」を高覧したとある。1788（天明８）年には、８代藩主信明(のぶはる)の国入りに従った比良野貞彦(ひらのさだひこ)が『奥民図彙(おうみんずい)』の「子ムタ祭之図」を描いており七夕(たなばた)祭、織姫(おりひめ)祭、二星祭などの文字が記されている。また藩政時代は現在のような組ねぷたや扇ねぷたではなく、四角な燈籠に飾りをつけたものや、野菜を形どった組燈籠ねぷたであったことがわかる。運行は弘前八幡宮の祭礼にならい、町内ごとで運行され、照明はロウソクだった。

1793（寛政５）年には、幅一丈８尺（５メートル 40 センチ）、高さ５間（９メートル）の大型の「ねふた」が出陣したとの記録があり、数十人の担ぎ手が必要だったと思われる。



平良野貞彦の『奥民図彙』（天明８年/１７８８年）

（２）人形化
（文化～文政　1804～1830）

文化年間は、次に続く文政年間と合わせて、江戸後期の町人文化爛熟(らんじゅく)期だった。弘前では、４万５千石から７万石、さらに 10 万石に昇格し

たことを機に、天守閣も再建され、城下は華やいでいた。そして、そのころの町民には圧倒的な経済力があり、燈籠 の大型化･人形化も行われた。人形燈籠 は、箱形と違って技術･資材･製作日数が必要で、そういう余裕を持てる時代になって、人形化させることが可能になったのであろう。

９代藩主 寧親(やすちか)の時代の 1813（文化 10）年には「ねふた」は３尺以下、太鼓は１尺以下の大きさとし、太鼓はねふたに同行でなければ罰するというお触れが出るが、1829（文政 12）年には 10 代藩主 信順(のぶゆき)の指示で３尺という大きさ制限もうやむやのうちに取り払われている。信順もまた、5 代藩主 信寿(のぶひさ)に負けず劣(おと)らずねぷた好きのようで、「竹長屋」という御見物所を整備させている。ここに人形ねぷたへの広がりと、再度の大型化がはじまり、信順のねぷた好きが後世の弘前ねぷたに大きく寄与したといえる。

（３）組ねぷたの発達
（幕末　1861～1868）

人形の組み立てなどは割合単純なもので、変化にも乏しいが、このころになって「見送(みおく)り」「高欄(こうらん)」に該当するものが備わってきた。江戸後期に描かれた平尾魯仙(ひらおろせん)の『津軽風俗画巻』のねぷたまつりの様子を見てもわかるように、組ねぷたは４代藩主 信政(のぶまさ)の時代、弘前八幡宮祭礼（1682~1883）の山車飾りの影響を受けて発達してきたものである。

平尾魯仙原画『津軽風俗画巻』のねぷた行列（文久年間）

コ ラ ム －3－

【組みねぷたに影響を与えた弘前の山車(だし)】

弘前の山車は、４代藩主・信政の時代の 1682（天和２）年８月 15 日の弘前八幡宮祭礼施行の際、神輿(みこし)の露払いとして各町内の若衆たちによって繰り出されたのが初めである。

弘前八幡宮は弘前藩の総鎮守として人々に崇拝(すうはい)されてきた神社だが、祭礼は、藩主が参勤交代を終えて無事に帰城した喜びを、城下の人たちと分かち合いたいということではじめられた。

山車飾物の特徴は、京都や江戸の文化の影響を受けた人形を中心とした高欄(こうらん)つきの山車であり、のちに弘前の組ねぷたに影響を与えたといわれている。

弘前八幡宮祭礼の山車

山車飾り、町印は、各町会と深いつながりがあり、能や謡曲･故事来歴などを引用して表現され、町会のシンボルとして、また繁栄を願って、町会の豪商たちが競って京都などから高価な衣裳を仕入れるなど、町人文化の粋(いき)を示すものでもあった。展示されている人形や衣裳(いしょう)の中には 270 年以上前の享保年間のものもあり、現在では技術的にも再現不可能な衣裳も展示されている。

明治に入ってからは廃藩となったこと、また神仏分離により八幡宮との根拠も薄れ、節目にしか市民の目に触れなくなったことから、貴重な文化遺産は倉庫の奥深くに眠ってしまっていた。

しかし、この貴重な文化遺産である山車を保存しようという機運が盛り上がり、1994（平成６）年４月、追手門広場内に山車展示館が建設され、再び甦(よみがえ)ることになった。現在は、山車展示館に７つの町会の山車が展示保存されている。

- 場所：山車展示館（弘前市下白銀町 2-1）
- 問合せ先：弘前市立観光館（TEL0172-37-5501）